

36. 内容知・方法知

現在、多くの学者が「〇〇知」なる「知」を書物の中で述べています。北尾倫彦氏は「学校知」、高階玲治氏は「形式知」「暗黙知」という言葉を使いながら、総合的な学習の充実によって、「知の総合化」を促そうとしているのです。

多くの「知」の中でも、「内容知」「方法知」は、生活科や総合的な学習で子供に身に付けさせたい力として注目されてきた言葉です。

内容知・方法知とは

児島邦宏氏は次のように「内容知」と「方法知」を定義している。

「内容知」とは、我々が外界の事物や事象について認識した結果としての知識である。

「方法知」とは、知識や技能自体をどのように獲得していくかという、学習の方法にかかわる知の形態である。

また児島氏は、

「内容知」から「方法知」への重心を移動することは、子供自身が知の創造へ向かうという積極的な契機になる

と述べている。生活科では、対象に様々なはたらきかけを続けることから、実感や納得の伴った「知」が子供の中に定着していく。だから、「方法知」から「内容知」へ…ということだろうか。

—— 実践から ——

生活科では植物を育てます。水をどのようにやるのかな？どこに鉢を置くのかな？ぐにゃっと曲がってきたよ。どうしよう！…。一連のお世話の仕方、大きくなってほしいと願って行くあたたかいかかわり方を子供が身に付けます。これは「方法知」そのものを身に付けることです。

そして、種蒔きから、きれいな花が咲き、次の年への種を取るまでの長い活動を通して発見したこと、気付いたことなどは「内容知」と言えます。対象とのかかわりを通じて得た「知」です。

教師側が与え、子供が受け取って身に付ける「内容知」や「方法知」ではなく、子供が何らかの方法でやってみて、試行錯誤を繰り返しながら身に付ける「方法知」と、結果として身に付く「内容知」が、生活科でも総合的な学習でも大切です。